

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：24403

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K15862

研究課題名(和文)慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」の解明とペアレンティングへの支援

研究課題名(英文) Investigation of Parenting Programs for "Parenting of Concern" Provided by the Parents who have Infants and Preschool Children with Chronic Disease

研究代表者

榎木野 裕美 (Naragino, Hiromi)

大阪府立大学・看護学研究科・教授

研究者番号：90285320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、慢性疾患を抱える乳幼児の親に対し、看護師が捉える「気になる養育」を分析し、親へのペアレンティング支援を検討することである。文献検討し、看護師への質的調査を行い、10カテゴリーの親の「気になる養育」の様相を明らかにした。そして「気になる養育」に対する支援について、全国372名の看護師への自記式調査を行った。その結果をもとに、「子どもの生活」「子育てへの親の力」「慢性疾患を抱える乳幼児の親の養育」を視点に入れたペアレンティング案を作成・検討した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to investigate parenting support for parents by analyzing "concerning parenting" as perceived by nurses in the parents of infants and young children with chronic diseases. Investigation of the literature and a questionnaire survey of nurses revealed aspects of "concerning parenting" in 10 categories. Additionally, a self-administered survey was conducted on 372 nurses throughout Japan about support for "concerning parenting." Based on the results of this survey, parenting proposals for "child's lifestyle," "parent's child-rearing ability," and "parenting for young children and infants with chronic diseases" were created and examined.

研究分野：小児看護学

キーワード：気になる養育 慢性疾患 乳幼児の親 ペアレンティング

1. 研究開始当初の背景

乳幼児期は、生きること自体に養育者(親とする)への依存度が高い。子ども・親の結びつきは非常に強いものであるため、これが容易に不適切養育のリスクに転じる可能性がある。子育てを取り巻く環境や生活状況の厳しいなか、現代の親は子育ての学習をする機会が乏しい。子育ての問題は、親として育つ機会が不足していることが影響していることが指摘(笠原,2014;今井,2011)され、健康な乳幼児の養育であっても、子どもの世話不足、怒りながらの育児等、親の「気になる養育」状況が報告(佐藤,2006;藤永,2009)されている。

一方、乳幼児が疾患を抱えていると、親は疾患管理に偏った養育になりがちになり、看護師は親の養育に違和感を覚え、気になっている(小出,2006)がその内実には明らかではない。また看護師の疾患管理の支援は多くみられるが、養育の視点からとらえた研究は皆無に等しい。そこで本研究では、慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」の内実を分析し、疾患別特徴と共通点から疾患管理に偏らない養育全般のペアレンティング支援のあり方を検討するものである。

本研究により明らかにしたいことは、慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」の内実の解明することであり、ここで慢性疾患として取り上げるのは、心疾患、腎疾患、呼吸器疾患、小児がんである。これらの疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」について疾患別特徴と共通点を明らかにし、慢性疾患を抱える乳幼児の親のペアレンティングへの支援のあり方を検討する。慢性疾患を抱える子どもの親は、どうしても子どもの疾患に関心がいきがちな状況にあるが、慢性疾患を抱える乳幼児の親が子どもの養育(育児)に目を向けることになれば、親の育児力の向上になる。これは、乳幼児の受けるべき養育の保障に繋がる。また、親の養育の疾患別特徴を踏まえ、意図的に親へのペアレンティング支援に活用することで、看護師が、親子に対するホリスティックなアセスメントができる力を養うことにもなると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、慢性疾患(心疾患、腎疾患、呼吸器疾患、小児がん)を抱える乳幼児の親の養育状況に着目し、看護師が捉えた親の「気になる養育」の内実を分析し、その疾患別特徴と共通点を解明し、親へのペアレンティング支援のあり方を検討することにある。慢性疾患を抱える乳幼児の親が、疾患管理のみにとらわれるあまり、不適切な養育行動に陥ることなく、「子ども」の健やかな育ちに向けた養育ができる支援の構築を目指している。これは、平成27年施行である児童福祉法の一部を改正する法律案:小児慢性特定疾病児童等自立支援事業に向けた研究であり、乳幼児期の養育のあり方を追究す

ることが、慢性疾患を抱える子どもの自立に繋がっていくと考えられる。

3. 研究の方法

1)各年度における研究方法

平成27年度研究:文献検討及び質的調査を行う。文献検討では、慢性疾患を抱える乳幼児の養育、健康な子どもをもつ親の「気になる養育」、ペアレンティングについて検討する。質的調査は、慢性疾患を抱える乳幼児が入院する小児専門病院、大学病院に勤務し、研究協力への同意を示した看護師に対して、面接ガイドインによる半構面面接を行う。調査内容は、看護師の属性、疾患毎に乳幼児の親に対して、看護師が気になった児に対する言動、世話の仕方等である。

平成28年度研究:前年度に引き続いて質的調査を実施するとともに、その結果をもとに慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」とペアレンティング支援の量的記述的調査を行う。自記式質問紙は、親の「気になる養育」状況とそこから考えられるペアレンティング支援の項目を抽出し、文献検討の結果も含めて作成する。便宜的抽出法による小児専門病院、大学病院に勤務し研究協力への同意の得た看護師に対して、質問紙を送付し郵送法にて回収する。調査内容は、疾患別親の「気になる養育」とペアレンティング支援に対する認識等である。

平成29年度研究:前年度の量的調査の分析と共に、研究協力施設との検討会をもち、疾患別親へのペアレンティング支援項目の検討をする。

2)倫理的配慮

平成27年度質的調査、平成28年度量的記述的調査にあたり、研究代表者所属機関の研究倫理委員会及び研究協力機関の要請に応じて研究倫理委員会に申請し承認を得た。

4. 研究成果

【平成27年度の研究成果】

1)文献検討

文献は、医学中央雑誌と国立情報学研究所論文情報ナビゲータ(CiNii)を用いて、10年間の「気になる親」「母親」「気になる養育」「乳幼児」「慢性疾患」「ペアレンティング」をkey words とし検索し45件を得た。親は家庭生活や子育ての学習をする機会のない中で子育てを経験していた。健康な子どもを持つ場合においても子どもの「泣き」に困り親が泣きなくなったり、イライラするなどの困難を抱えていた。慢性疾患を抱える乳幼児では、さらに困難感が強く、この困難は慢性疾患による症状の改善に伴って軽減していた。病状が改善されると乳幼児の発達に目が向けられていた。入院に付き添っている親の養育態度では、子どもへの不憫さからしつけが甘くなったり、生活のルーズさや世話の行き届かさに看護師は着目していた。

2)「気になる養育」に関する質的調査

「気になる養育」に関する質的調査では、研究参加者の看護師は14名で、看護師の看護経験年数は平均9.2年、面接時間は平均34.2分であった。

看護師が捉えた親の「気になる養育」は、10カテゴリー、34サブカテゴリーを抽出した。看護師が着目していた「気になる養育」は、親子の生活の過ごし方、子育てそのものに対する親の力、子どもが疾患を抱えている中で親が陥りやすい養育であった。

親子の生活の過ごし方を見ると、看護師は【親子の生活リズムの乱れが気になる】と子どもの生活とともに親の生活の乱れ、親中心の生活時間による生活を子どもがしていることを「気になる養育」と捉えていた。一般的に子どもの起床時間・就寝時間が遅いことが問題視されている。乳幼児では、親が生活をリズムづけることになるが、入院中であっても、早寝早起きを基盤にした生活リズムは健全な発育発達に深く関わり、子どもの健康管理、発達を支えるベースになる。看護師は、生活リズムを整える意義を親が理解できるように支援する必要がある。

子育てそのものに対する親の力では、【子育てをできるかが気になる】【子どもとの情緒的な関わりが少なさが気になる】ことや【子どもへの虐待的な関わりが気になる】こと、【子どもに影響する状況を親が抱えていることが気になる】【親子関係の違和感が気になる】と捉えていた。【子育てをできるかが気になる】は、子どもの衣食、安全などの乳幼児への一般的な日常生活ケアや子どもとのやり取りができないことである。【子どもとの情緒的な関わりが少なさが気になる】は、親が付き添って子どもの傍らにいても、子どもとの情緒的なやり取りがないことである。【子どもへの虐待的な関わりが気になる】は、親の子どもへの関わり方が不適切な養育に当たることである。【子どもに影響する状況を親が抱えていることが気になる】は、親自身が子どもの育ちに関わる状況・要因を抱えていることであり、親が社会人としてのマナーに欠けていたり、子どもを育てるという親としての自覚に乏しいこと、親に支援者がいないことなどである。【親子関係の違和感が気になる】は、親の子どもへの関わり方や子どもから親への話しかけに対する親の反応から感じる親子関係を、看護師が気になると捉えた親の養育である。

子どもが疾患を抱えている中で親が陥りやすい養育を見ると、親が子どもから離れられないことや子どもを心配するあまり何もさせないこと、子どもの顔色を窺ったり何でも買い与えたり、何も注意しないこと、疾患管理上の必要な制限を守れないことなど、親が【病児の子育てをできるかが気になる】こと、【独特な考えで子どもに関わることが気になる】ことや【主体性がない子どもへの関わりが気になる】と捉えていた。【病児の子育てをできるかが気になる】は、慢性疾患を

抱える子どもは何らかの医療的ケアを要することが多く、子どもが乳幼児期では、親にその医療的ケアを含めた疾患管理が委ねられている。疾患や医療的ケアに関する指導を親に実施している中で、看護師が気になると捉えた親の養育である。【独特な考えで子どもに関わることが気になる】は、一般的にはその偏った育児とも言われ、親自身の子育て観による子どもへの関わりが、子どもの健やかな育ちに影響を及ぼしかねないと考えている。【主体性がない子どもへの関わりが気になる】は、親の考えよりも子どもの思いや言うままに親が行動をしていることに対して、看護師が気になると捉えた養育である。これらのカテゴリーは、子どもが抱えている疾患に関わらずみられた「気になる養育」状況であった。

平成27年から児童福祉法の一部を改正する法律案で、小児慢性特定疾病児童等自立支援事業として、必要な療養上の管理、日常生活上の世話その他の必要な支援を行う事業、親に対する相談支援、情報提供、助言等を挙げ慢性疾患児童の自立への取り組みが検討されている。看護師が捉えた親の「気になる養育」状況は、健康な子どもをもつ親の「気になる養育」状況との共通点多かった。疾患を抱えた子どもも、一人の“子ども”であり、養育そのものに対するサポートを親は求めているのである。慢性疾患を子どもを抱えているために、親が陥りやすい養育状況を看護師が捉え、今後の子どもの自立支援に向けてためにも、乳幼児期からの親の養育支援をしていく必要がある。

【平成28年度の研究結果】

1)対象者の属性

研究参加者は、看護師372名で、関東圏が38.2%、近畿・中国圏が22.3%、所属する病院の種類は、大学病院66.7%、小児専門病院32.8%であった。勤務の部署は小児病棟51.3%と最も多く、小児科病棟、小児外科病棟、成人との混合病棟の順であった。小児看護経験年数は、26.3%が3~5年であった。

入院児に多い疾患は、複数重複している小児が最も多いが、主な疾患では、小児がん、循環器疾患である。入院への付き添いについて、乳児では56.5%、幼児では46.5%が原則として付き添っていた。面会時間は、76.9%が制限あり、21.5%は制限なしであった。

2)親の「気になる養育」

質的調査で得られた「気になる養育」の状況の親の程度を見ると、非常に多い 多いのは、「親に支援者がいない」45.4%、次に「親の生活リズムがルーズになっている」「親の生活時間に合わせて子どもを生活させる」「子どもの安全に対する配慮がない」「子どもが何をしても注意しない」「子どもに振り回される」「子どもの言うままになっている」「親が社会人としてのマナーに欠ける」である。いない ほとんどいない のは「普段

の子ども様子を把握していない」「子どもに話しかけない」「子どもへのスキンシップがない」「子どもを抱っこしない」「親の言うことを聞かないと子どもへの暴力がある」「子どもを無視しがちである」であった。

3)疾患別に見た親の「気になる養育」

小児がん乳幼児の親の「気による養育」：非常に多い 多い のは、「親の生活リズムがルーズになっている」「普段からお菓子を中心にした食事をしている」「子どもに振り回される」「子どもの言うままになっている」「親に支援者がいない」であった。いない ほとんどいない は、「普段の子どもの様子を把握していない」「子どもに話しかけない」「子どもへのスキンシップがない」「子どもを抱っこしない」等であった。

循環器疾患乳幼児の親の「気になる養育」：非常に多い 多い のは、「親に支援者がいない」が最も多かった。いない ほとんどいない は、「普段の子どもの様子を把握していない」「子どもに話しかけない」「子どもへのスキンシップがない」「子どもを抱っこしない」「子どもの成長発達に関心を向けない」「子どもを無視しがち」であった。

4)親の「気になる養育」に対する支援

親の「気になる養育」として、親子の生活の過ごし方、子育てそのものに対する親の力、子どもが疾患を抱えている中で親が陥りやすい養育の視点で見ると、70%以上の看護師が何らかの支援をしていた。

【親子の生活リズムの乱れが気になる】に対して、「親に改善を求める」よりも50%の看護師は「親子のおかれた状況の情報収集」し、47%は「起床・就寝の積極的な声掛け」をしていた。【子育てをできるかが気になる】に対して60%以上の看護師が「親子のおかれた状況の情報収集」し、次に50%が「親に育児指導」をしていた。【子どもとの情緒的な関わりの少なさが気になる】に対して、約40%の看護師が「親の子どもへの思いを傾聴」したり「親のおかれた状況に関する情報収集」をしていた。直接的に「子どもへのかかわり方の指導」や「子どもへのかかわり方のモデルを示す」のは20%以下であった。【子どもへの虐待的な関わりが気になる】【子どもに影響する状況を親が抱えていることが気になる】に対して、50%の看護師が実践していた支援はなく、40%程度の看護師は「親のおかれた状況の情報収集」にとどまっていた。また【親子関係の違和感が気になる】に対して、40%が「親のおかれた状況の情報収集」であり、「心理士に対応依頼」をした看護師は20%程度であった。【病児の子育てをできるかが気になる】に対して、70%程度の看護師が「親のおかれた状況に関する情報収集」や「疾患や医療的ケアの理解について確認・指導」、50%が「親に育児指導」をしていた。

【独特な考えで子どもに関わることが気になる】に対して、「親のおかれた状況の情報収集」や「親の子育ての考え方を尋ねる」看

護師は40%程度であった。【主体性がない子どもへの関わりが気になる】に対して支援をしていた看護師は少なく、30%は「親子のおかれた状況の情報収集」であった。

親の「気になる養育」に対して、看護師は気になった状況に対する「親のおかれた状況の情報収集」し、その把握に努めていたと考えられる。多くの看護師が支援をしていたのは【病児の子育てをできるかが気になる】である。その内容は「疾患や医療的ケアの理解について確認・指導」と「親に育児指導」であり、子ども生命、安全に直結している支援であり、同時に疾患を中心とした支援であると捉えられる。これらの支援の子ども疾患による違いを見たが、疾患別による支援の違いはなかった。

また、いずれの「気になる養育」に対しても「看護師間の話し合い」よりも「看護師・多職種間での話し合い」が多かったことが、「子どもの関わり方のモデルを示す」ことは少なかったことから、医療チームとして、養育に対して協働することに繋がっているとは言えない。慢性疾患を抱える乳幼児の養育について、看護師が支援することの難しさを示していると捉えられる。

【平成29年度の研究成果】

親の「気になる養育」とその支援の量的調査報告を基にして研究協力施設における看護師との検討会をもち、支援項目を検討した。

1.ペアレンティングについて:ペアレンティングとは「親をする(子育て)」「親になっていく」「親のあり方」「親をする」等と理解される。現在、親を取り巻く状況は厳しく、父親や母親による養育のみならず社会資源の投入も必須と言われる中にある。子どもが慢性疾患を抱えている場合、社会資源の乏しさからその親を中心とした養育を考えていくことになる。

ペアレンティングの構成要素と考えられているのは、「子どもの日常生活を満たしうる能力」「子どもとのコミュニケーションを含めた情緒的・共感的関わり」「子どもに教え、生きることや学習のスキルを身につけさせること」「子どもの養育監督責任を持つことなどが総合的には親になっていく力として評価されていくこと」「親が自分を受け入れていくこと」「社会とつながること、社会資源を知ること」が求められる。つまり人を育てるために育児技術や知識だけでなく、親自身が自分を受け入れていく必要がある。

2.ペアレンティングプログラムの活用:親の「気になる養育」では、親子の生活の過ごし方、子育てそのものに対する親の力、子どもが疾患を抱えている中で親が陥りやすい養育の視点が指摘された。そのため、既存のペアレンティングプログラムを取り入れることで、親子の生活の過ごし方、子育てそのものに対する親の力への対応が可能になる。親の何が「気になる養育」であるかを捉えてペ

アレンティングプログラムを紹介していく。現在、親が自分の長所に気づいて前向きな方法を見いだせる手助けとなるノーバディズパーフェクト、親自身が子育てスキルを身に付けて子どもの問題に前向きに対処できるようにするトリプル P、親が具体的で効果的なしつけの技術を身に付けるコモンセンスプログラム、親子の愛着に着目した安心の輪プログラム等が活用できる。

3. 疾患を抱える乳幼児の親へのペアレンティング：子どもが疾患を抱えている中で親が陥りやすい養育の視点を考慮したペアレンティングが必要である。疾患に関わらず共通するのは、慢性疾患を抱える子どもでは、セルフケアの獲得を考えていくことになるが、乳幼児期は、子ども主体のセルフケアの基盤を築く大切な時期であり、学童期以降のセルフケアに与える影響が大きいことを親が理解できるように支援する必要がある。幼児は、自分のことが徐々にできるようになるので、日常生活の中に、疾患に必要な療養行動を組み込んでいき、その生活が乳幼児にとっての“ふつう”と考えられるようにすることである。

親の性格・家庭状況を考慮し、親の気持ちを受容する。乳幼児の発症時期が胎児期・出生時から、あるいは健康な子どもとして生活していた中での発症かの違いを認識しておやを理解する。

ケアのために3視点を評価する。乳幼児自身について、疾病そのものの評価、子どもの人としての評価である。親について、親としての評価、子どもの責任者としての評価である。乳幼児と親を取り巻く環境の評価である。

疾病の説明と共に今、何をすべきかを助言する。親の役割が明確になる。

丁寧な十分な量の医学的情報を提供するが、詳しすぎると負担になる。希望のある態度を根底におき、分かりやすく繰り返し説明することが重要である。

罪の意識はできる限り軽減する。罪の意識から乳幼児に関わるのが難しい状況では、ゆっくり話をし疾患に関する誤った因果関係について説明する。

親の孤立を防ぐためには、可能な社会資源、親の会等の利用を勧める。

親と乳幼児の今までの経験を大切にする。親は乳幼児の疾患をめぐって様々な経験をしていることも多い。その経験を尊重しながら話を進めていく。

親理解のポイントとして、親の行動や気持ちを理解すること、親が不安を抱きやすい原因を理解すること、親は安心を求めていることを理解していく。そのうえで支援に当たっては、カウンセリングとケースワークの視点をもっているいろいろな時と場を利用して支援する。親の安心にはカウンセリングマインドでの支援が必要である。親からの訴えを待つのではなく、気づけば、気になればすぐに日常的な支援を始めていく。

以上を踏まえて、慢性疾患を抱える乳幼児をもつ親が、親として育つように支援していくことが重要になる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 榎木野裕美、岡崎裕子、小代仁美、川勝和子、武田善美(2017). 慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」の様相, 大阪府立大学看護学雑誌, 23(1), 59-65. 査読有

〔学会発表〕(計1件)

1. 小代仁美、榎木野裕美、岡崎裕子、川勝和子、武田善美. 慢性疾患を抱える乳幼児の親の「気になる養育」の実態と支援, 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017.12.17. 宮城県.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎木野 裕美 (Naragino Hiromi)
大阪府立大学・看護学研究科・教授
研究者番号: 90285320

(2) 研究分担者

岡崎 裕子 (Okazaki Yuko)
大阪府立大学・看護学研究科・講師
研究者番号: 2440360728

羽畑 正孝 (Habata Masataka)
大阪府立大学・看護学研究科・助教
研究者番号: 2440360728

小代 仁美 (Ojiro Hitomi)
奈良県立医科大学・医学部・講師
研究者番号: 80531136